

令和6年度 一般選抜中期日程 情報科学部情報科学科 小論文
出題の意図と解答の傾向

問題

【出題の意図】

本入試問題は学生が提供された資料を読み解き、それらを基にして論理的思考と分析能力を用いて論述する力を評価するものであった。資料として、東京大学未来ビジョンセンター（編）『未来探求2050 東大30人落ち生が読み解く世界』（日経BP日本経済新聞出版社、2021）から、「社会をデータ駆動に変えるデータ工学」（喜連川優著）という章の文を引用し、加えて日本経済新聞2023年1月6日朝刊記事「データ量爆発、25年に2倍」から世界で生まれ利用されるデータの総量、ネットワークに繋がるIoT機器の台数に関するグラフ、総務省「令和2年版情報通信白書」から企業における各業務領域での今後のデータ活用予定に関するグラフを引用した。

データの急速な増加とその活用の重要性が高まる中で、データを理解し、活用する能力があらゆる分野でのイノベーションと問題解決の鍵となる。そこで本入試問題は、デジタル社会における課題について複数の資料を読み解き発展のためのアイデアを考察することを通じて、情報の解釈能力、論理的思考と分析能力、表現力を評価する内容とした。

【主な採点基準】

問1

データ共有についての研究者の認識、領域によって認識が変化していることを読み取れていること、データ共有による協力や新たな発見の可能性について触れられていること、データ駆動型による新たな価値について考察されていることが評価のポイントである。

問2

資料2図1の2つのグラフからデータとIoT機器いずれもの量が増え続けておりこれからも増えていく見通しであることを読み取る必要がある。そしてデータ量が増えていくにも関わらず、図2からは全体的にデータの活用について積極的ではなく、さらに活用しようとしている業務領域に偏りがあることを指摘してほしい。

問3

データの設計学という新しい分野が何を意味しなぜ重要なのかを理解し論じられており、さらにその発展のためにはどのような要素が寄与するか、複数の要素を自ら挙げて考察することができていれば高く評価する。

【解答の傾向】

全体的な傾向

- ・記載文字が判読困難なケースが散見された。

問 1

- ・全体的に概ね満足できる解答が得られていた。しかしながら、「多くの研究者のデータ共有に対する認識の変化」について記述されているものの、「データ駆動型によってどのような新たな価値が生まれると考えられるか」についての記述が不十分である解答が多く見られた。
- ・また少数ではあるが、自身の考えを述べるだけに止まる解答も見られた。

問 2

- ・図表からのデータ読み取りは、概ね正確だった。しかし、読み取ったデータから問題点を記述し、その考察を論理的に展開する際に不備が見られる解答が散見された。読み取ったデータを基に、考察を論理的に深める能力を身につけることが望まれる。
- ・「現在データ活用しておらず、今後もその予定がない」が3割～5割であることについて述べている解答は多かったが、業務別のデータ活用について、前向きな意向を示すものとそうでないものがあることについて触れている解答は少なかった。
- ・問題点を明確に述べている解答が少なかった。

問 3

- ・おおむね出題の意図は理解できていた。
- ・データ設計学がどのようなものかについては正しく説明できていた解答が多かった。
- ・発展にとって重要な項目については、多くの解答で具体的に示されていたが、一部ではあるが問題の意図が理解できていないか、資料と無関係な独自の見解を述べた解答がみられた。